

『京都本能寺  
尼崎本興寺 開祖日隆大聖人畧縁起』について

三 浦 成 雄

「京都本能寺 開祖日隆大聖人畧縁起」の表紙外題は「日隆大聖人御縁軌 全」となっている。  
尼崎本興寺

本書の原本は未詳であるが、写本が香川県丸亀・本照寺に現存している。書写の年について末尾に、「寛政十二  
庚 申 九月写之」とあり、書写したのは「蓮屋登羅」で、自筆である。

現存する隆師御伝記類の中では、日心(両山五八世)の「宗門第九再興正導師両山開基日隆大上人略縁起」の次に  
位置するものであろう。日心作の縁起は心師が本興寺在職中に著した「両山歴譜」の中に収められており、著作年代  
としては、天明三年(一七八三)から天明七年(一七八七)の間とみることができる。

両山六四世日芳の「開祖徳行記試評」が文化八年(一八一二)の著述であるから、この間少なくとも二十四年の間  
隔があり、丁度半ばに位置するのが、この写本の成立の時期である。

本写本の内容をみると、事蹟の年号が他の御伝記と異り、隆師の生誕については至徳式<sup>乙</sup>  
あり、得度は明徳二年、妙本寺へは応永九年十八才、師日霽聖人の示寂が應永二十三年、尼崎辰己の浜へは応永二十  
八年、桃井家臣中村元成の叛乱は応永三十三年等があげられる。  
<sup>子</sup>と記した横に元<sup>甲</sup>

又、本文中備中本隆寺、讃州本妙寺の建立を記したあとに、

「後代京本能寺尼崎本興寺若退転の時ハ備中本隆寺讃州本妙寺を西国両本寺とあをぐべきものなり云々」  
との記載があり、これについて両山四八世日憲の隆師伝について「德行講演抄」第四十座に、

「後代若京本能寺尼崎本興寺退転時、備中新庄本隆寺讃州卯辰本妙寺、西国、可レ仰三両本寺二者也云々」

とあり、小西徹龍先生は、「日隆聖人略伝」(二三三頁)の中で、本写本が憲師本にあたる可能性があると述べられている。

ここで、この「略縁起」を書写した蓮屋登羅女について記しておく、彼女は後に出家して妙光と名を改めたが、その妙光尼が記した自筆の「真如庵濫觴記」(文政七申とし極月妙光記之)がある。

彼女は安永六年(一七七七)摂州大坂の住人蓮屋治兵衛の子として生れた。一六、七才の頃より法華信仰にはいり、母と共に藤井寺や岡松寺へ参詣し法話を聴聞、二十才の時に父を亡くし、更に信心を深めた。折しも寛政十年本能寺より両山六十二世日元上人が大坂へ巡賜の折、お守本尊を賜り、翌十一年本能寺の千部法要に参詣し、日元上人より逆修戒名を授与された。「信心不退、玄題五十万遍、法名蓮乘院妙光日至」と為書きされ、「蓮にも乗てゆきけん寂光のみやこに至る善女人なり」と歌が添えられている。登羅女が二三才の時である。この時から出家の志をたて、江戸に住む姉をたづね、途中沼津の光長寺にも母と共に参詣している。

この原本書写は、寛政十二年であるから、二十四才の時である。従って、本文中の文字に誤記がみえ、例えば、三島開山日典上人を「日曲上人」と書き(日曲の右旁にきよくと訓をそえている)、又「塔頭」を「どうどう」と読んだり、隆師の父「尚儀」を「尚義」と書いて右旁に「なおよし」と記したりした部分があり、知識の不慣れな時期であったことが知られる。

文化四年四月八日、本興寺両山六十五世日忍上人より御本尊を授与され、文化七年十月八日三四才で出家剃髮、この間、説法参詣の数二千四百八座を教えた。本興寺両山六十九世日英上人より「真如庵」の住職に任命され、同庵の復興を托された。真如庵の復興がなり、落慶入仏法要を奉修した後、木屋村本信寺忍照院師のお世話によって、同村の平五郎の娘ちよと云う娘、当時二十二才、信心深い彼女を弟子にし、日英上人の戒師により剃髮、「妙照」と命名された。文政五年（一八二二）の本興寺本堂その他諸堂の焼失にあたっては、妙光尼の復興勸募の努力はすさまじく、大阪惣信者の女中講に働きかけ、五ヶ年で千五百文を勸募している。

文政十年五月、真如庵を弟子妙照尼にゆづり庵内に隠居、本興寺両山七十二世日慈上人より賜った七条袈裟を、妙照尼に伝授した。

天保二年（一八三一）の宗祖日蓮大聖人五百五十遠忌には、本堂人天蓋を、金子五二両一分一朱、天王寺屋より銀子を山納している。その他諸堂の莊嚴等、多大の浄財を寄進している。

この「濫觴記」の末尾の年号は、「天保三辰年壬十一月前真如庵蓮乘院妙光日至花押」とあり、妙光尼五十六才であった。

尚、本文を活字にするに当り、学林講師和田晃尚先生に依頼、多くの日数を費して、原文のあじわいをできるだけ伝えるべく、可能なかぎり原文に忠実に活字にしていたことに感謝する次第である。